

皆様おはようございます。

高瀬瑞恵

主のみなを賛美いたします。

皆様のあついお祈りと愛を痛切に感じつつ、本日お証させていただけることに心より感謝申し上げます。

まず、時系列に基づきお話しさせていただきます。

昨年3月16日体調不良のため受診した総合病院にて白血病の疑いありと診断され、専門医がいらして受け入れ可能な病院を探してください、そのまま救急車で搬送されました。

主人がハワイに奉仕に伺っていたため、娘二人がすぐに呼び出され、即入院が必要であり病状と治療の説明を受けました。その時点では足に大きな青あざが出来ており手足には点状出血も無数にありましたが、まだ自力歩行が可能でした。

ですが白血球が通常3400から8400のところ57000もあり大変危険な状態だったので翌日には容態が急変し、HCU（高度治療室）に移されました。

自発呼吸もできなくなりましたので、圧力で酸素を送り込むマスクをされ、抗がん剤投与を一週間休むことなく続けられました。その後クリーンルーム（無菌室）に移動、白血球がもどるまで待ち一定の値に達したら一週間退院、そして次の抗がん剤治療というサイクルで4回（4クール）繰り返すことになりました。

ところが4クール目に備え入院した折、白血球の値が低いままだったため、数日まってから4クール目を開始されたのですが、治療が終わり白血球が出てくるのを待っていてもいつまでも出てこず点滴により白血球を促す薬を続けても全く出てきませんでした。

そのため骨髄本体を採取して検査をしたところ、骨髄自体が何も作り出していないカスカスの状態であることがわかり、いわゆる死の宣告を受けたのです。その後、主の奇跡によりカスカスの骨髄から白血球がポッとわいてきたそうで命を取り留めましたが、アスペルギルスという真菌に侵された肺は、治療でも治らず、右肺上葉部の切除手術を受け3月末に退院となり、今に至っております。

1 今回のこの病の意味は何だったのでしょうか？

当初病を受け入れはしたものの、何故という思いがなかったか？という嘘になります。私はどんな過ちをしたんだろうか？何のための学びなのだろうか？ということをお問自答しつつ主にぶつけておりました。

そうすると自分の中にある傲慢さに気づかされたのです。

① 人を裁きやすい心がある。

② 私たちの結婚は主の導きによるが主人にとって私が必要だから主が導かれたのだという思いが心の大半を占めておりました。

ですが実は私にとって必要な人だから備えられたということに気づかせていただいたのです。

2 肉の戦いと 霊の戦い

そうは言っても実際の治療はとてつらいもので、食べ物を口にすることも出来ませんでした。吐き気・高熱・下痢・口の中と舌がただれる症状のうえにトイレに行こうとして気を失い倒れたこともありましたが、肺が真菌に侵されてからは喀血を繰り返しました。聖書を読むことが出来ない中、祈りも「イエス様助けてくださいあなたを愛しております」と繰り返しておりましたが、

「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」ヨハネによる福音書 16章 33節 後半

「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。わたしは、あなたがたのところに戻って来ます。」ヨハネによる福音書 14章 18節 前半

「あなたがたのあった試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に合わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。」第一コリント人への手紙 10章 13節 後半

それぞれのみ言葉を握りしめておりました。

では何故そのような状態の中でみ言葉を握りしめることが出来、死の宣告の時も「白血球が出てくるのを待っていたら良いのだろう」と平安でいられたのでしょうか？それはみ言葉によるやしないと祈りです。

「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」ピリピ人への手紙 4章 6-7節

私は世界中の多くの方々に祈っていただいています。家族のサポートは勿論のことですが、私が入院していた一年以上 KIBC 賛美チームは祈り私の働きをカバーしてくれていました。そして何より私の命の危機の時主人からの献血のお願いに対し急で3日間拘束されるにも関わらず、多くの方が応答してくださったと聞いています。

色紙・カード・メール・お見舞い等の愛のサポートにより励ましを受け支えていただいていたのです。その一つ一つが医師に「ありえないことが起きた」と言わせた主の奇跡を通して、今私は

ここに生かされております。

3 今回の病からいただいた福音とは？

ピリピ人への手紙 4 章 6-7 節をもう一度お読みいたします。

「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。

そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」

心配や思い煩いは死を招き、感謝は命を招きます。私たち人間は元来感謝しながら生きるように神に作られた被造物ではないでしょうか。そのため、感謝しなければ魂と心は病んでしまいます。感謝は魂を生き返らせ不平不満は死をもたらす言葉です。

しかし感謝と賛美は命の言葉であり、感謝し賛美すると死んだ魂が生き返ります。

私たちは感謝を体質化・生活化すべきなのです。朝目覚めてから一日中感謝です。そうすると神は私たちの感謝を受け入れてくださり、私たちを祝福し守ってくださり、日々の必要を満たしてくださいます。

私が6人部屋に入院しているときの出来事ですがつらい治療となかなか思うように良くならない方々は心の不安を看護師にぶつけておりました。耳を覆いたくなるような言葉でののしるのです。ですが夜にはお母さん助けてまだ死にたくないとお祈っておられました。

私自身の治療も辛く長引いておりましたが、私や主人が耐えられるように主のご配慮によりVIPルームに入れてくださり電気ピアノを持ち込み練習させてもらえたり、緩和ケア病棟にあるホールへ主治医自ら付き添ってくださってグランドピアノで練習させていただきました。

そのおかげでコンサートをほとんどキャンセルさせていただいておりましたがクリスマスコンサートだけはすべて行わせていただけたのです。

4 まとめ

み言葉を体質化・生活化していくことが大切であるということです。そして今生かされている私の働きとして「あなたがたの体はあなた方のうちに住まれる神から受けた聖霊の宮であり、あなた方はもはや自分自身のものではないことを知らないのですか、あなたがたは代価を払って買い取られたのです。ですから自分の体をもって神の栄光を表しなさい」第一コリント6の19-20

大切なパートナーである主人とともに皆様のお祈りに支えられ感謝しつつお証と賛美をもって一人でも多くの魂を救うため、主のご用をさせていただきたく願っております。

この証を書き終えた途端、10年目の乳がん検診でひっきり詳細な検査を受けることになりました。また白血病は再発すると、二度と抗がん剤を使うことが出来ないと聞いております。サタンは攻撃の手をゆるめません。どうか引き続きお祈りいただきたくお願い申し上げます。

では応答の賛美「マイトリビュート」を感謝をもって賛美させていただきます。